

第9回ヘンデル・フェスティバル・ジャパン
企画2 オラトリオ《サムソン》
演奏会批評 (関根礼子氏)
『グランド・オペラ』2012年春号 pp. 145~146

◆ヘンデル・フェスティバル・

ジャパン

ヘンデル

《サムソン》

◎演奏会形式

◆ ◆ ◆

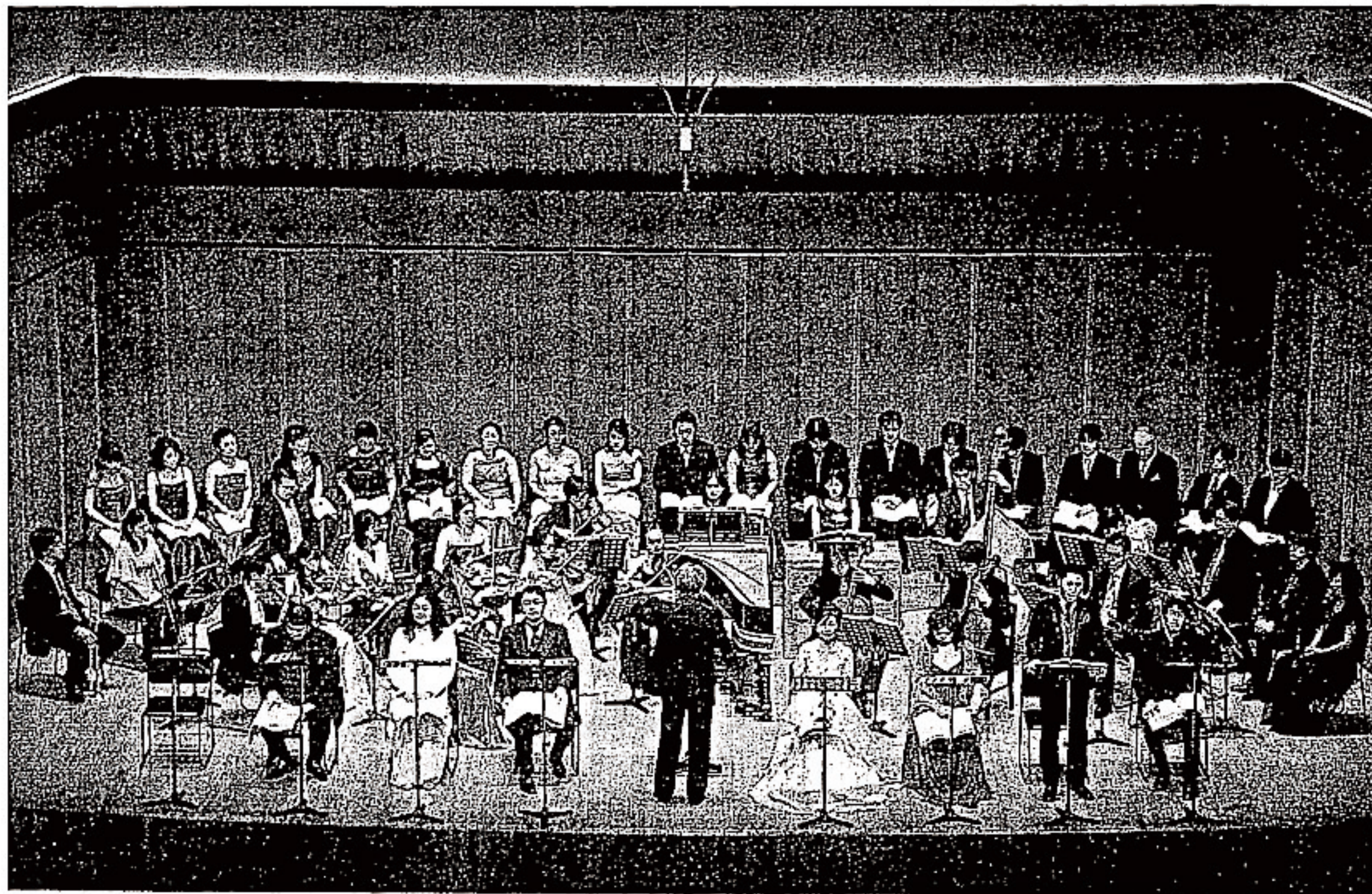
サムソン…辻裕久/デリラ…森永朝子/ミカ…波多野睦美/マノア…牧野正人/イスラエルの女…ヘリシテの女…デリラ付きの侍女…佐竹由美/ハラファ…酒井崇/イスラエル人…ヘリシテ人…使者…前田ヒロミツ/指揮…三澤寿喜/管弦楽&合唱…キヤノンズ・コンサート室内管弦楽団&合唱団

最

近H F J (ヘンデル・フェスティバル・ジャパン)の

演奏が着実に向上している。2011年1月の《エイシスとガラテア》に続き、第9回公演でオラトリオ《サムソン》H W V 57を上演、各パートの水準が一段とそろって

ヘンデル・フェスティバル・ジャパン《サムソン》より
写真提供：ヘンデル・フェスティバル・ジャパン



きて、楽曲の魅力に迫ってみせた。この作品は、《メサイア》とほぼ同時期に作曲され、1年遅れの1743年に初演。かなりの長編だったため、その後改訂とカットが繰り返され、初演版はお蔵入りになっていった。だが今回、ハレ・ヘンデル新全集の一部として初演時の校訂復刻版が完成したことから、その校訂版を使用した世界初の上演が実現した。4時間を越す演奏時間は確かに長いが、ヘンデルの音楽は大変心地よく、初演当

時は《メサイア》をしのぐ人気があったということに納得させられた。物語はジョン・ミルトンの劇詩《闘士サムソン》を原作に、ニューバラ・ハミルトンが台本化。旧約聖書に登場する怪力の持ち主サムソンを描いた内容である。様式感を的確に押さえた指揮(三澤寿喜)のもと、古楽器による管弦楽団、合唱団とも、前回にも増して安定した好演ぶり。管楽器などに多少もつれ気味の箇所が

あっても、感興を損なうほどではない。独唱陣も健闘し、特にサムソン(辻裕久)の声が比較的好調だったことが、全体をリードする要となった。敵対する巨人ハラファは、酒井崇が量感のある声で圧倒。友人ミカの波多野睦美も、毅然とした表現が頼もしかった。

(2012年1月9日、

浜離宮朝日ホール)

関根礼子